地方に残る庭園文化－知覧武家屋敷庭園（薩摩）から学ぶ－

木佐幸佳

１．はじめに

地方に独特な庭園づくりが残っているのは、全国的に見てもあまり例がない。出雲地方の他に青森県津軽地方など数えるほどしかない。その中から鹿児島県薩摩地方にある知覧武家屋敷群にある庭園を紹介するとともに、そこから出雲流庭園に参考となる点を考えてみたい。

２．知覧武家屋敷庭園が生まれた経緯

鹿児島市中心部から南へ車で小１時間、薩摩半島南部の丘陵地帯に位置する南九州市知覧町に武家屋敷群があり、そこに独特な庭園が残されている。

江戸時代、薩摩藩島津家は徳川幕府に心服しておらず、いざとなれば武士たちが領内で蜂起できるように「麓」制度を取っていた。「麓」とは、中世の山城の麓に作られた城主の館と武士たちの家で作られた城下町の始まりのようなものだが、この形は全国的にはすでに滅んでしまったとされている。薩摩藩では領国である「薩摩」・「大隅」・「日向の南半分」に、102 箇所（後に 113 となった）の「麓」を作った。武士たちはそこで普段は半士半農で過ごしたという。

ここ知覧で今のような武家屋敷町の形を作ったのは、島津家１８代久峯（1732 年～1772 年）とされている。城主に従って京都や江戸を見た家臣たちは和歌や俳句などの文化的教養を身につけ、この地はやがて「薩南の小京都」と言われるようになった。そのような状況の中で庭園づくりが上級武士階級に広まったという。

３．武家屋敷町の様子

町並みの真ん中には、長さ約 700mの「本馬場通り」と呼ばれる道路が東西にほぼ直線状に通っている。よく見ると他の城下町にもあるように、途中で曲がったり T 字形に交差したりして、見通しを妨げている。南北からは小路と呼ばれる小さな脇道が直交している。この通りに面して、現在公開されている庭を持つ武家屋敷群が南北に配置している。

この通りは三段から四段の石積みが高さ約１m、その上にイヌマキの生垣が高さ２mほどに統一されているが、中にはチャノキと二段に積み重ねているところもある。天端にはうねりを付けて大刈込してあり、それが遠くまで続いている。

白い石垣と緑の生垣が織りなす景観は見事であ

図－１　知覧町の位置図

図－２　武家屋敷庭園案内図

写真－１　本馬場通り（１）

写真－２　本馬場通り（２）

り、『手づくり郷土賞』『美しい日本の歴史的風土 100 選』を受賞している。通りの切石積みは本家筋、玉石積みは分家筋を示しているという。

４．知覧武家屋敷庭園

現在、公開されている庭園は７つあり、いずれも国の名勝に指定されている。このうち１つが池泉式で残りは枯山水式となっており、
それぞれの庭園を紹介していく。

１）西郷恵一郎庭園

門はないが屋敷の中に曲がりながら入っていく。東の隅に築山があり、突起のある大きな石組があり、その尖った先端部は鶴の首のように傾いている。築山の上にイヌマキが大刈込されて、右手にかけてサツキが刈込されている。所々に石灯篭が３基置かれている。

写真－３　西郷恵一郎庭園

２）平山克己庭園

東北隅に巨石がそそり立つように組まれている。その背後の生垣が築山のように大刈込されている。その手前にサツキがあり、石が点在する。ここにも石灯篭が点在している。築山の後ろに母ケ岳が望まれる。庭石は地元産で安山石系であるという。

写真－４　平山克己庭園

３）平山亮一庭園

門を入って右手に厠の跡がある。昔ここで用を足していると外を通る人々の話が聞こえ、それで天下の情勢を知ったという。かつてはどの家も門の横に厠があったらしい。

ここは全庭が大刈込一式となっており、巨石による石組は見られない。サツキの手前には 10 個の四角の切石があり、この上に盆栽を置いて観賞しながら俳句や和歌を楽しんだという。

写真－５　平山亮一庭園

４）佐多美舟庭園

知覧の庭園の中で最も広く多くの石組や樹木があるため、最も豪華と言われる。ここにも古風な石灯篭が置いてある。東南隅に大きな立石による枯滝石組があり、築山の上部には石灯篭がある。庭石はこの地を流れる麓川の上流から運んだ凝灰岩質という。

５）佐多民子庭園

表門が瓦葺切妻造、左右の石垣も高く立派な笠木がのっている。庭への入り口にも瓦葺の中門がある。玄関を通らず、この中門を通って縁側から座敷へ案内するのが、位の高い客を

写真－６　佐多美舟庭園

写真－７　佐多民子庭園

迎える対応の仕方という。

巨石石組の下部に砂利を敷き詰め、座敷まで飛び石を打っているのは他の庭には見られない特色であるという。

写真－８　佐多直忠庭園

６）佐多直忠庭園

門は中央の切妻屋根と左右の一段低くなった小さな屋根があり、突き当りに屏風岩と呼ばれる目隠しがある。高い格式の家に許された形と言われる。

ここも枯滝石積が東北隅にあり、母ケ岳が一望できる。大刈込の前にウメとイヌマキの古木が配されており、薩摩藩出入りの庭師に作らせたと言われる。

写真－９　森重堅庭園

７）森重堅庭園

城跡の山麓に位置する唯一の池泉式庭園。庭園は屋敷の南側および東側にＬ字型に配置されている。ここも大きな石組の背後に大刈込が大きく盛り上がって高い塀を作っており、山にはスギが植えられている。ここには土蔵もあり、屋敷はNHK大河ドラマ「西郷どん」の撮影に使われたという。

５．この武家屋敷庭園の特徴

１）武家屋敷に作られた江戸中期の庭園

この形式の庭園は上流武家屋敷に作られている。この通り沿いにある未公開の家にも石垣や生垣が連続しているのを見ると、恐らく同様な庭があると推測される。一方、他地区の一般民家にはこのような庭づくりは広まっていないようだ。

江戸中期の作という庭石や石灯篭は古びて苔むしており、時の経過を感じさせる。

写真－10　時を感じる古びた石灯篭

２）迫力ある庭木の大刈込

庭木の樹種は少ないが、イヌマキやサツキなどの大刈込は見応えがある。通りの生垣は屋敷から見ると、背後で連山のように波を打つように見せる私的

写真－11　屋敷から見る生垣は背後の連山を思わせる（西郷恵一郎庭園）

写真－12　通りから見る生垣はうねりのある衝立に見える

空間をつくり出している。一方、通りから見ると生垣は衝立のように見え、その天端はうねりを見せて緑豊かな公的空間を提供している。

また、ほとんどの枯山水式庭園は東方にある母ケ岳を借景とするため、庭が東側に作られている。

写真－13　波濤を感じさせる枯滝石組

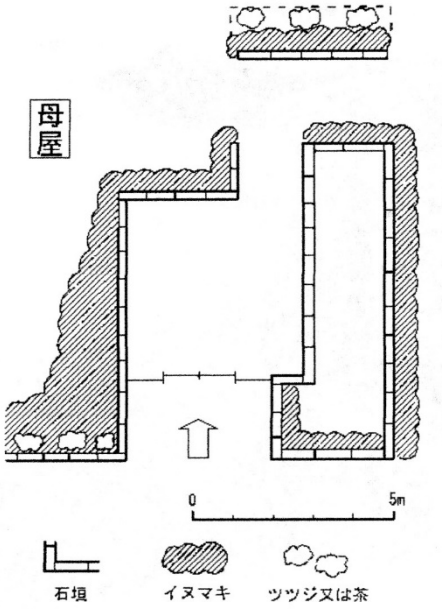
３）ダイナミックな縦長の奇岩群の石組

ある庭の説明の中に、「庭の立石は縦長の奇岩の積み重ねで奥になるほど高く石を立てるのは、波が海岸に打ち寄せて波濤が天を突くような姿を現している。その左右にある変化に富んだ石はその波の飛沫が広がっているように見せている」とある。まるで東映映画の冒頭シーンのようであるが、このことは他家の庭園にも当てはまると実感した。

４）玄関までの進入路が複雑

家の入口部はすぐには玄関にたどり着けない構造になっている。門をくぐると石垣に突き当たり、その横をすり抜けるとまた石垣に突き当たる。そこを直角に曲がって母屋に入っていく桝形の構造が多い。

この突き当りの石垣を沖縄ではヒンプンと呼び、家の外から中が見えないように目隠しや魔除けとして石積みなどを置くという。この地はかつて琉球との貿易が盛んであったため、その影響を受けたとも言われている。また、門があるのは武家屋敷のためであり、この地の地域色が現れていて面白い。



図－３　桝形構造とヒンプン

写真－14　門の外から家の中が見通せない
（平山克己庭園）

写真－15　門を入っても玄関はまだ見えない

５）庭は精神修養の場

庭の置石の１つは地中深く埋めてあり、その家の主人は「自分の家の庭にはたとえ大きな騒動が起ころうとも、びくともしない石がある」と思うことで、自分の肚が据わるようにしているという。

庭が精神修養のためにあるということは、その家の繁栄や幸福を願うことにつながっている。このことは独特の庭づくりが残っている出雲地方や津軽地方の考え方にも通じる点があり、大変興味深い。

６）保存に対する『熱意』と『実践』

Ｓ51 に調査報告書が作成されており、国の名勝(1981 年指定)および重要伝統的建造物群保存地区(1981 年指定)になっている。指定は 40 年以上前であるが、当時の資料を見ても庭園の様子は現在の状況とほぼ変わらないようである。このことからも「地域の貴重な宝をぜひ後世に伝えていきたい」という地元関係者の『熱意』と、庭園と景観を守り続けている『実践』が感じられる。

６．維持管理について

この武家屋敷庭園は本馬場通りの生垣も含めて、庭園所有者７名（うち１軒は市に譲渡しており、現在、市も構成員となって参加している）による事業組合が維持管理をしている。各組合員の庭園と生垣は個別に管理しているが、組合員以外の生垣は剪定や害虫防除を専門業者に委託をして共同管理している。対象地区内の通りの清掃は組合員以外も参加して、箒代が支払われている。

管理費は年間20万人を超える庭園来場者の入場料収入が当てられている。そのうち、50%が組合運営費（生垣管

写真－16　生垣を剪定作業中

理費、人件費、トイレ清掃・ごみ処理費、広報経費等)、50%が組合員個人への配当となっている。組合の運営は事務局が行い、３名の事務局員が雇用されているという。

現地を訪れた際、ちょうど生垣の剪定作業をやっているところに遭遇した。剪定は年２回、害虫防除は年５～６回行われているという。本馬場通りだけでなく小路もきれいに剪定されていて、すっきりとした空間に仕上がっていく様子が垣間見えた。

市は生垣管理について助成を行っておらず、重要伝統的建造物群保存地区や国の名勝指定になっているため、修景や修復に対して助成が受けられるという。

このように管理体制がしっかり出来ているため、生垣をはじめとする庭園がきれいに管理され、美しい景観が守られていることを理解できた。

写真－17　「特攻の母」と慕われた鳥濱トメさんと特攻隊員たち

７．知覧町番外編

１）特攻基地の町

この地は太平洋戦争末期の陸軍特別攻撃隊いわゆる特攻隊の出撃基地として、全国的に有名である。町内には知覧特攻平和会館があり、飛び立って行った若き隊員たちの名前と遺書が展示されている。

平和会館へ通じる道路沿いには、寄進された石灯篭が今から 80 年近く前の英霊を悼むように、桜の木とともに並んでいる。

写真－18　桜並木に並ぶ石灯篭

２）知覧ねぷた祭

本馬場通りにある旧家を利用したカフェで地元の特産「知覧茶」を飲んでいると、壁にある「知覧ねぷた祭」のポスターに目が留まった。コロナ禍でしばらくできなかったが、今年久しぶりに開催するとのこと。「独自の庭づくりが残る津軽の祭りがどうしてここに？」と疑問に思って、早速地元の人に聞いてみた。

その結果、青少年交流事業として青森県平賀町（現平川市）との交流が H2 より始まったという。今では姉妹都市縁組を結んでおり、大小８基のねぷたが出るほど盛大な祭りにまでなったとのこと。

「知覧の人たちは、夏の風物詩として 25 年も続くこの祭りを楽しみにしている」とタクシーの運転手が話してくれた。

写真－19　知覧ねぷた祭のポスター

８．この地から出雲流庭園が学ぶこと

１）国や県の文化的価値の評価を得ること

知覧ではS52に調査報告書が完成し、S56に「国の名勝」「重要伝統的建造物群保存地区」の指定を受けている。

一方、出雲流庭園の文化的価値への評価がなされていないため、地元住民や観光客に対するアピール力が弱い。作られて50年以上経過している庭園もあり、公の機関や大学などの学識研究者による調査・研究が必要である。また、所有者が庭を修復する場合にも助成制度がないので、住民に対する保全活動への動機づけが弱いのも現状である。

２）観光資源としての認知度が不十分

知覧では庭園所有者が事業組合を作って、観光協会と協力して広報活動を行っている。また、同じ町内にある特攻平和会館と連携して、地域の魅力度アップを行っていると思われる。

一方、出雲流庭園は魅力度の発信が不十分なため、観光資源として生かし切れていない。「出雲文化伝承館」「原鹿の豪農屋敷」「平田本陣記念館」の個々の施設が、単独で紹介している状況である。それらを結ぶ周遊コース、途中にある出雲平野に広がる民家の庭のガイド説明などが考えられる。その際、国引き神話や築地松、たたらと出雲平野の関係も話の題材としては面白い。

全国的に有名な「出雲大社」には多くの観光客が訪れており、この人たちへのアプローチをもっと積極的に行うことを検討する必要がある。

９．おわりに

この知覧地域では、「知覧文化」という最近注目されている地域学の冊子がかなり以前から年１回発行されており、現在は「薩南文化」として引き継がれている。その本にはこの地域の文化的事物や伝承などが語られており、武家屋敷群のことも書かれている。また、ここの町並みは整然としていて道路もきれいであり、この地域の文化度の高さが感じられた。このような風土であるからこそ、庭園文化のような良いものが残っていると思った。

出雲地方も同じように本物の文化が残っている土地であるため、ぜひ「出雲流庭園」を次の世代に伝えていきたいと強く感じている。そのためにも、今は様々な行動を起こすべき時ではないだろうか。

○参考文献

１）「知覧の庭園」リーフレット　知覧武家屋敷庭園有限責任事業組合
２）「知覧文化13」　知覧町立図書館(S51.3)
３）「知覧町郷土誌」　知覧町（S57）
４）「知覧武家屋敷町並み－伝統的建造物群保存対策調査報告書－」　知覧町教育委員会(S52.4)
５）「風土が作る文化－文化景観としての石垣－」　漆原和子「国際日本学」(2005.3)
６）「旧武家屋敷地区における生垣景観の共同管理手法と管理の持続性に関する研究」
鶴和誠子、野原卓　（公財）日本都市計画学会都市計画論文集（2013.10）